

22	碧海	八ツ田小学校	オカダ カオルコ
		名前	岡田 薫子
分科会番号	08	分科会名	音楽教育

**【研究題目】 表現に対する思いや意図をもって、リズム伴奏を考えることができる子の育成
—小4 音楽 「八ツ田小 50 周年記念校歌にリズムアンサンブルをつけよう」の実践を通して—**

1 主題設定の理由

VUCA と呼ばれる現代の予測困難な時代には、柔軟な発想や問題解決力、協働して新たな価値を創造する力が求められている。音楽科は、創造性や協働性、自己表現力を育むことができる教科であり、特にみんなで一つの曲を創り上げる「音楽づくり」のような活動では、その力が大きく育まれると考えられる。

また、小学校学習指導要領（音楽編）では、音楽づくりの学習において、思いや意図をもって表現を工夫し、そのよさや面白さを生かして音楽をつくることが重視されている。児童が自らの思いや意図を根拠として表現を選択し、創造的に音楽とのかかわることは、音楽づくりの学習を充実させる上で重要である。

しかし、これまでの旋律づくりの授業では、児童は意欲的に創作に取り組むものの、「なんとなくよさそうだったから」といった理由で表現を選ぶ姿が多く、自分の思いや意図を明確にもって音楽をつくるまでには至っていなかった。一方で、4 月に行った音楽の授業に関する事前アンケートでは、「100 年後も残る曲を作りたい」「誰かに向けて合奏したい」といった発言が見られ、音楽を通して自分の考えや気持ちを表現し、伝えたいという意欲をもっていることがうかがえた。このことから、児童の表現意欲を生かしながら、思いや意図を明確にして音楽づくりに取り組めるような学習の工夫が必要であると考えた。

そこで本研究では、児童にとって身近な校歌を題材とし、歌詞や旋律から受ける印象を基にリズム伴奏を工夫する活動を設定する。また、仲間との協働的な話し合いや、創作したリズム伴奏を本校の創立 50 周年式典で発表する機会を設けることで、相手に思いを伝えることを意識しながら表現を練り上げることができると考えた。これらの活動を通して、表現に対する思いや意図を深め、主体的にリズム伴奏を考え創造する力を育てたい。このようなねらいから、研究主題を下記のように設定した。

**主題：表現に対する思いや意図をもって、リズム伴奏を考えることができる子の育成
～小4 音楽「八ツ田小 50 周年記念 校歌にリズム伴奏をつけよう」の実践を通して～**

2 研究の構想

(1) 目ざす児童の姿

主題の実現に向けて、目ざす児童の姿を以下のように設定した。

思いをもって主体的に表現し、意図的に楽器を選択してリズム伴奏をつくることができる児童

上記のように定義して、抽出児の変容を追って手立ての有効性の検証を進めた。

(2) 研究の仮説と手立て

目ざす児童の姿に迫るために、以下の二つを研究の仮説に据え、それを検証する手立てを講じて取り組んだ。

【仮説Ⅰ】

校歌のイメージを膨らませる校歌研究所の活動や 50 周年式典という発表の場を設けることで、曲に対する思いをもち、主体的に表現することができるだろう。

手立てⅠ-① 題材の工夫と発表の場の設定

手立てⅠ-② 校歌のイメージを膨らませる「八ツ田っ子校歌研究所」の設定

【仮説Ⅱ】

楽器の特性やリズムの構成パターンを理解したり、曲想に合った表現に対する話し合いの場を設けたりすることで、自分たちの思いに合うように、意図的に楽器を選択し、リズム伴奏をつくることができるだろう。

手立てⅡ - ① 楽器の特性やリズム構成パターンを理解するための音楽ゲーム

手立てⅡ - ② 学習用端末の共有機能を使用した話し合いの場の設定

(3) 抽出児について (A児)

本実践では、児童Aの変容を中心に実践を考察し、手だての有効性を検証していく。

【児童Aの実態】

4月の音楽の授業に関するアンケートでA児は、「音楽の授業は好きだ」「曲やリズムを作る活動や器楽演奏に挑戦したい」と答えている。しかし、「日本の音階の良さを感じ取りながら、せんりつをつくろう」の単位では、A児は、「和の雰囲気曲を作りたい」と漠然とした思いをもつことができたが、なぜこの旋律にしたのか聞くと、「なんとなくそれっぽかった」「友達の旋律がイメージに近かったから」と述べた。

【児童Aに期待する姿】

児童Aには、校歌に対して具体的な思いやイメージをもち、思いに対して、楽器やリズムを明確に決められる姿に期待したい。また、仲間と演奏について話し合い、自分の納得するリズム伴奏を創り上げてほしい。

3 研究の実際と考察と成果

(1) 校歌に込められた思いを探究し、自分の思いをもって表現しようとする児童【手立てⅠ - ①、②】

前単元の話し合いの中で、「これから残っていくような曲をみんなで作りたい」と考えた児童たちの思いから、みんなで話し合い、『全員で校歌にリズム伴奏を付け、50周年式典で発表する』という企画を立てた。児童たちは、「できるかな」と緊張しながらも企画が通ると「大役だね」ととても喜んでいて。そこで、第1時では、「校歌にリズム伴奏を付けるためには、どのような活動をしたらいいか計画を立てよう」と問いかけた。すると、資料1のように話し合いが進み、最後に児童Aは、「みんなが大事にしている校歌だから、きちんと調べて、みんなが納得するようなリズム伴奏を創りたい」と話した。そこで、校歌研究所で探究したいことをアンケートにとると、「成り立ち (18人)」、「リズム伴奏の付け方 (22人)」、「歌詞の特徴 (25人)」、「曲の特徴 (25人)」となった。そのため、第1次である第2～4時では、校歌研究所を立ち上げ、全員で校歌に込められた思いを探究することとした。

第2時では、国語科教員である本校校長と一緒にワークショップ形式で、児童と共に歌詞の読解を行った。まず、校歌のイメージについて聞くと、児童たちは、「明るい」、「元気」、「八ツ田小学校が必ず最後にある」と答えた。そこで、児童に歌詞を提示し、一番から歌詞を詳しく調べていこうと声をかけた。すると、児童から、資料2のような発言が見られた。児童Aは、C3の校歌の一番ごとに違う校訓が入っているという気づきから、そのイメージがリズム伴奏づくりに生かせることに気づき、表現しようとする姿が見られた。最終的には、「校訓が入っていること」「自然豊かな言葉がたくさん入っていること」「児童の成長を願っている歌詞であること」など、5つの観点にまとめることができるたくさんの発見をし (資料3赤枠)、これらの発見をリズム伴奏創作に生かしていこうと考えることができた。児童Aは、「はじめは元気な曲だと思っていたけど、校訓が入っていて、言葉のイメージが1番から3番まで全然違うことがびっくりした」「みんなと話していて、リズムづくりに生かせそうな発見がいっぱいあった」と感想を述べた。このことから、ゲストティーチャーである本校校長とのワークショップにより、校歌の歌詞について理解が深まり、思いをもって、主体的に表現しようとしていることがわかる。

その上で、第3時では、メロディの特徴について「拍子」「テンポ」「強弱」「旋律の流れ」「調性」「伴奏の形」の6ポイントにしぼり、イメージや思いについて話し合った。はじめ、楽譜を見ているだけだと児童はあまり特徴を発見ができなかったため、拍子やテンポのポイントで実際に歩きながら拍子やテンポを変えて歌う

A: やったあ。めっちゃうれしい。

C1: 発表できるなんて、すごいね。

C2: それならちゃんと作らなきゃ。

T: ちゃんとして、どういうことかな。

A: いろんな人が聴きに來るから、ちゃんと校歌について調べて、みんなが『お〜』って納得する感じの曲を創りたいってことじゃないかな。

C3: どんなことを調べるの。

T: それじゃあ、アンケートでみんなに意見を聞いてみようか。

【資料1: 第1時全体での話し合いの様子】

C1: すごい発見した! 校歌には、「強く正しく美しく」が入っている!

C2: ほんとだ。気づけなかった。

C3: もしかして、そういうイメージで歌詞が3番分作られているのかな。

A: これ、リズムつくる時にいかせる!

【資料2: ワークショップでの様子】

ワークショップを行った。すると、児童Aが、「4分の2拍子は、行進みたいで、4分の4拍子は流れる感じだ」「だから、伴奏の形も全然ちがう」ということに気づいた（資料4赤枠）。これを受け、他児童が「リズム伴奏も伴奏だから、メロディを支えるような気持ちで作ったらいいと思う」と発言した。以上より、手立てによって、校歌に対し具体的なイメージや思いをもち、主体的に表現しようと考えていることができたことがわかる。

【資料3：児童の歌詞研究のまとめ】

【資料4：児童の楽譜研究のまとめ】

ハツ田小学校で50年歌われてきた曲だから、きれいな感じにハツ田小学校をイメージできるようにして歌いたいです。優しく、なめらかな感じに歌いたいです。若草は、子供たちをイメージして歌ったりしたいです。家庭も使ってハツ田小学校の校歌の若草の曲にあった楽器を使って演奏したいです。

強く、正しく、美しいことをイメージして歌う校歌はハツ田小学校の感じだし、若草のようなハツ田小学校にしたいから調べ学習をして校歌は1つ1つの言葉にいろんな思いがたくさんあると思いました。調べ学習をして歌う時の思いが多くなりました。

3番は、かきつばたとか、花の命に夢さそうなど、花の色、など、花を大切にしている感じで、自然を大切にしているイメージ。四分の四拍子や、四分の二拍子を意識してうたうとよりいい感じになるかもしれない。（児童A）

【資料5：児童たちの校歌に対するイメージや思い】

第4時では、校歌研究所で校歌に込められた思いを探究した児童たちに校歌に関するアンケートを再度とった。すると、全員が校歌研究所で探究する前よりも校歌に対するイメージが膨らんだと答えた。また、校歌に対する思いやイメージを聞くと、リズム伴奏づくりに生かせるような具体的な意見が見られた（資料5）。これは、全員が校歌研究所での活動を通して、校歌に対するイメージが膨らみ、表現に対する思いをもつことができたと考えていることができる。以上のことから、校歌研究所の活動や発表の場を設けたことで、児童Aは曲に対する思いをもち、主体的に表現しようと感じることができたと言える。

（2）校歌3番の曲想に合う楽器を選択する児童たち【手だてⅡ - ①、②】

第2次では、表現への思いを大切にしながら、意図をもってリズム伴奏をつくる活動を行った。はじめに、楽器の選択が意図的に行えるようにするために、本単元の開始時より、毎回、モジュール学習として音楽ゲームを取り入れた。この活動をすることで、楽器の特徴を理解した上で楽器選択ができるようにした。さらに、毎回行うことで、仲間の考えを聞き、自分との考えの違いから自分の考えを振り返り、より良いものに練り上げていく姿を期待した。

音楽ゲーム①として、子どもたちに楽器の音色を理解してもらうために、「今月の歌『気球に乗ってどこまでも』に合うように、手拍子部分を楽器に変えてみよう」と提案した。すると、児童たちは打楽器コーナーに行き、「まようなあ」、「これやってみたいな」と、音を鳴らしながら楽器を選び始めた。児童Aは、一周した後、タンブリンを選択した。思いを聞いてみると、「そろっているのが気持ちいいし、正確に打ちたいから」と話した。資料6の児童Aの1回目の記録用紙を見ると、その思いによって意図的に楽器が選択できていることがわかる。ただ、曲想に合うと感じた理由やカスタネットからタンブリンに変更した理由は、まだ詳しく言語化できない状態だった。その後、同じ活動を繰り返すと児童Aの考えは、資料6の2、3回目のように考えが変化していった。この変化していった様子から、仲間の意見から手拍子とクラベスの音色が似ていることに気づいたことがわかる。さらに楽曲の高音が続くという旋律の特徴とクラベスの音色が高く聴こえるという音色の特徴を関連付け、最終的にクラベスが最適であると結論付けたことがわかる。この活動後、第5時として、全員で校歌3

「校歌のリズム伴奏に自分の思いをもつ」ための授業の中で、ある児童が「校歌は、若草、つまり子供の成長をメインにしているので、そんなに強すぎないように打つことが良いと思うので、金属製の打楽器が合うと僕は思いました」という意見をもった。そこで、その意見を他の児童に紹介することをきっかけに、話し合い活動を進めていった。児童の意見を紹介後、児童が前時に書いた校歌のリズム表現に対する思いをテキストマイニング（資料7）で示した。すると、児童たちは、『そろえたい』や『きれい』や『なめらか』が多いんだね、「校訓の美しくが表せるといいな」と感想を述べた。**児童A**は、みんなの思いを見て、「美しくリズムをそろ

【1回目】
1. 選んだ楽器→ (タンブリン) 最初は、カステネットでもいいと思ったけど、
2. 理由→ (タンブリンはシャリンという音とドンドンという音と合わせていて、しりり叩きやすいし、正確に叩けるから、曲に合うと思います。)

【2回目】

1. 選んだ楽器→ (クラベス)

2. 理由→ (児童B さんの音がきれいで手拍子みたいという理由が僕も、きれいな拍子と似ている楽器は曲に合うと思う、クラベスにしました。)

【3回目】

1. 選んだ楽器→ (クラベス)
2. 理由→ (前と似てて、手拍子と似ていて、「気球に乗ってどこまでも」は音低いところが少なく、高い曲だから、音が高いクラベスを使いました。

3. 一回目の楽器と変えた理由→ ()

【資料6：児童Aの音楽ゲーム①での記録用紙】

決意 やさしい きもち こめる
 リズム そろえる 色づく 葱く
 美しい 意識 音楽 花 楽い つられる
 演奏 強い 明るい 強弱 四分 拍子 歌詞 歌う
 四拍子 歌 きれいな 校訓 ちがい
 合わせる 盛り上がる きれい 校訓 うたう
 3番 かきつばた 4分 植物
 強い 稲やか きれいな 若草 歌声
 そろう 自然
 大切 歴史 なめらか 未来

【資料 7：校歌 3 番の表現に対するイメージや思い】

【資料8 楽器選定アンケートと話し合いの記録】

【資料9：楽器選択に関する話し合いの様子】

実際に音楽ゲーム②「リズム感情当てゲームを行うと、児童たちは、引いたカードを見て、「どうやって表現しよう」「これは、簡単だからきっとわかってもらえるよ」と話しながら、楽器コーナーへ行って、リズムを試し打ちし、楽器やリズムを決定していた。児童Aは、資料11の1回目の時は、表現に対する思いがあっても、それが相手にわかってもらえず、悩んでいた。そこで、学習支援アプリの共有機能を使って
友達のカードを見たり、友達に相談したり
することを教員が勧めると、「ああ、そういうこと！このヒントを見ながら、音の強弱や音色を変えればいいのか」と話した。その気づきをもとにもう一度音楽ゲーム②を行うと、資料11の2回目のように変化した。児童Aのという思いと、「大太鼓と小太鼓という2種類の楽器を使
用し、リズムを刻み、爆発音のように最後両方の楽器を
表現の工夫がわかる。

A screenshot of a game interface. At the top, it says '【1回目】' (1st Round). Below that, '①引いたカード' (1 card drawn) is displayed. The main area shows two cartoon characters, a boy and a girl, standing on a stage. Below them is a yellow button with the text 'リズムを刻み、音色を変えて表現しよう' (Let's create a rhythm and change the tone to express ourselves). At the bottom, there's a red arrow pointing to the right, and the text 'ポイント' (Points) is visible. The bottom of the screenshot shows the text '【資料11 : 1】' (Material 11 : 1).

この活動後、第6時として、学習支援アプリの共有機能を使って、校歌に各パートでリズム伴奏を付ける活動を行った。すると、児童Aは、リズムパターン表（資料10赤枠）を使って、仲間とリズム伴奏を作成し始めた（資料12）。最後には、前述の「きれいに合わせたい」という思いから、「歌やピアノ伴奏に合わせたリズムがいいのでは」という意図をもって、資料13のようにリズムパターン表を切り貼りして、クラベスのリズム伴奏をグループで協力して作り上げることができた。また、児童Aの所属するクラベスは、25分でリズム伴奏を完成させていた。児童Aは、「音楽ゲーム②でずっとリズムを作ってきていたから、楽しみながら思ったより簡単にみんなでリズムを作れた」と話していた。

C1：第1フレーズどんなリズムにする？
A：そろっているリズムだときれいだから、ピアノの左手とリズムを合わせたらどう？

C2：指揮者みたい！

C1：それなら、どんなリズムがいいかな？
A：パターン表のこれはどうかな。

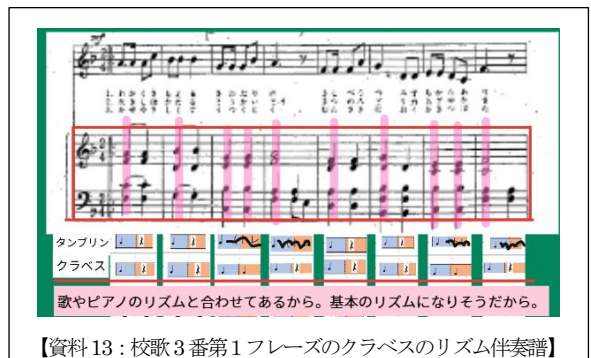
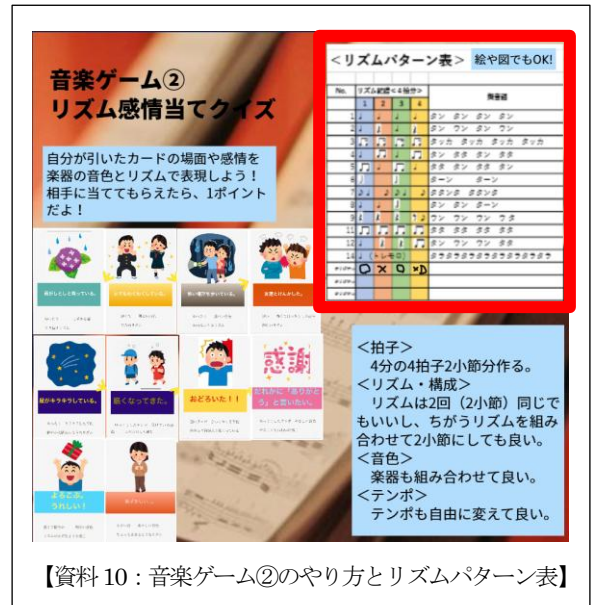
【資料12：クラベスパートでの話し合いの様子】

このことから、音楽ゲームに加えて、学習用端末の共有機能を使用して話し合いを行ったことで、自分たちの思いに合うように、意図的に楽器を選択し、リズム伴奏をつくることができたと言える。

(4) 校歌3番に合うリズム伴奏を練り上げる児童たち

【手立てⅡ - ①、②】

第7時では、実際に創作したリズム伴奏を全員で合わせて演奏した。すると、児童から「演奏がばらばら」「思いと全然あっていない」「自分の楽器が全然聴こえない」「話



し合って直したほうがいい」という話が出た。そのため、学習支援アプリの共有ノート上の総譜に児童が自分たちで改善点を書き出し（資料14）、第8・9時で改良していくことにした。第

【資料14：校歌3番第2フレーズの改善点】(名前は筆者が消去)

2フレーズの改良点としては、大きく分けて、①「拍子が変わっているのにリズムがあまり変化していないこと」と②「聞こえない楽器がある」という2点であった。

そこで、この2つの問題について全体で話し合ったところ、資料15のようにC1児童の発言をきっかけに児童Aが「クラベスパートの第2フレーズをなくす」という提案を行った。すると、他児童もこの児童AやC4の児童の意見から、自分たちの表現に対する思い(資料7)を思い出し、聴き手に自分たちの思いが伝わるように、ウインドチャイムを軸に全員でもう一度第2フレーズを改良することとした。このような活動を経て、最終的には、資料16のように自分たちの思いに合う納得のいくリズム伴奏ができた。児童Aは、「パパゲーノとパパゲーナみたいに鈴やトライアングルとウインドチャイムを交互に鳴らしたら、きれいに響きそう」と全体のバランスや他楽器のまとまりを考えて、発言していた。更に、第3フレーズでは、前述した児童Aの「きれいに合わせたい」という思いを受けて、最後の盛り上がりに向かって、ピアノ伴奏に合わせて、クラベスとマラカスを主役にして、交互にリズムを刻むことを生かしたリズム伴奏を全員で話し合いながら創作することができた。

C1：第2フレーズは、4分の4拍子に代わって、伴奏が流れる感じだから、ウインドチャイムさんを目立たせたほうがいい。(少し間が空く)

A：じゃあ、クラベスは鳴らさないで、第3フレーズで戻ろうよ。他の楽器もウインドチャイムを主役に考えたらいいんじゃないかな。

C2：えー、でも、せっかく作ったのに。なくなったらやだ。

C3：でも、ぐしゃぐしゃだったら、きれいじゃないじゃん。

T：みんな、どんな曲を創りたいんだっけ？

C4：きれいな曲。そろっていてなめらかな感じだった。

C2：そっか。たしかに、このままじゃ(相手に)伝わらないもんね。

【資料15：2つの問題点に関する全体での話し合いの様子】

その後、完成したリズム伴奏を6年生や50周年式典で発表すると、観客から「きれいな伴奏で、歌詞のイメージが伝わってきた」「こんなに3番

【資料16：校歌3番第2フレーズ改良前→改良後の総譜】

までイメージが違うと思わず、新しい発見だった」と感想をもらった。それに対し、児童Aは、「自分たちの思いや考えたことがちゃんと伝わってうれしい」と、感想を伝えていた。また、演奏後の振り返りシートでは「校歌に合うリズム伴奏を創るのは難しかったけど、たくさん話し合って考えて創ったものは、相手に伝わり、感動させられるのだとわかり、達成感があった」「やってよかった」と書き表していた。

4. 今後の課題

- ①リズム伴奏の練り上げの際、演奏技術による改良ではなく、創作の改良に目をむけられるようにすること。
- ②新しい題材においても今回のような活動の流れができるようにすること。